

専門科目

メディア表現特論A(表現×情報・メディア) Media Creation A (Creation× Information・ Media)

担当:三輪真弘・前田真二郎・松井 茂

単位:2単位 履修対象:1年/2年 教室:講義室W(301)

学期:後期(10月/11月) 実施方法:オンライン

科目のねらい・特色

音楽・映像・詩などの表現を、実作者からの視点を交えながら理解を深めていく授業です。まず、映画・映像史を俯瞰し、近年の映像表現の動向を分析します。そして、コンピュータ音楽、その中でもアルゴリズムック・コンポジションと呼ばれる作曲法を中心に、メディア社会における音楽の意義について考察します。加えて、芸術の根幹にある詩学をもとに、芸術諸分野の動向に接続し、作品制作に資するコンセプトの設計論を検討します。異なる分野の教員が合同で授業を行い、ディスカッションを行います。

到達目標

現代のメディア表現を理解する手掛かりとなる知識を講義を通して身につけます。授業では多数の作品を取り上げますが、それらが生まれた文化的・技術的な背景を意識しながら作品を鑑賞・分析できるようになることを目指します。今日の表現は突然現れたものではなく、多種多様な表現の上に成立しています。作品を構造的に読み解く能力を養い、メディア表現の研究・制作において必要不可欠な論理思考を高めることを目標とします。

講義形態

講義、ディスカッション。講義に関連した課題が出ます。

講義計画・項目

- 第1回 メディアアートの現在(1)
- 第2回 最初期の映画・映像と音響
- 第3回 実験映画・アニメーション・ビデオアート
- 第4回 画面の拡張とライブ表現
- 第5回 写真表現／現代映像
- 第6回 テクノロジーと声 I: 音波とアルゴリズム、コンピュータ音楽のふたつの領域
- 第7回 テクノロジーと声 II: フォルマント兄弟の活動: メディア論
- 第8回 またりさまをやってみる!
- 第9回 逆シミュレーション音楽とは何か
- 第10回 設計図としての詩
- 第11回 インターメディアの詩学
- 第12回 詩と音楽のあいだ
- 第13回 映像メディアと詩

第14回 メディアアートの現在(2)

第15回 メディアアートの現在(3)

教科書・参考書等

必要に応じて随時配布、指定します。

評価方法

種別	割合	備考
課題	50%	レポートなど
日常点	50%	授業に対する取り組み姿勢

メディア表現特論B(表現×身体・環境) Media Creation B (Creation×Body・Environment)

担当: 小林昌廣・赤松正行・前林明次

単位: 2単位 履修対象: 1年 / 2年 教室: (対面の場合) 事前に指定

学期: 後期(12月/1月) 実施方法: オンライン13回、対面2回

科目のねらい・特色

1990年代初頭にあらわれた「メディア・アート」と呼ばれる表現は、情報技術の更新をいち早く取り込み、諸領域を横断し、新旧のメディアをかつてない方法で連結するだけでなく新たなメディアを発明するなど、そのあり方自体が既存のフレームを逸脱していく運動としてとらえることができます。ソーシャルメディアに代表されるコミュニケーション、自然災害や環境・エネルギー問題、メディアを介した見世物的な催しやそれへの過度な依存など、あらゆる日常が非日常と境界線を持たなくなった現在において、メディア表現のもつ意味や可能性をあらためて検討することが必要となっています。それは同時に人間存在や世界との関わりを再検討することにもなるでしょう。授業では毎回、担当する教員がそれぞれの視点からテーマに沿った事例を挙げ、問題提起および分析、考察を行います。また3人の教員による対話の機会を設けることで、問題の共有と相互触発を活性化します。

到達目標

一口に「メディア・アート」と言ってもカバーする領域は広大かつ多様であるため、履修者は各教員が提示する具体的な視点やテーマ設定からその背景と概念について理解を深めます。また履修者は、各講義においてつねに批判的な思考をもって参加し、コメントすることが期待されます。さらに、各教員が紹介する個々の主題や事例の中に自身の制作・研究との関連性や差異を積極的に見出し、自己の思考の更新、改変のための手がかりを得ることを目指します。

講義形態

講義(座学)

講義計画・項目

第1回(12/1 全担当教員) オープニング

第2回(12/6 赤松) モビリティの歴史的変遷

第3回(12/7 小林) メディア身体論

第4回(12/8 前林) メディアと知覚

第5回(12/13 赤松) モビリティの社会的戦略

第6回(12/14 小林) AI身体論

第7回(12/15 前林) 「感覚」をつくる技術

第8回(01/10 赤松) リアリティの認知的変容

第9回(01/11 小林) メディア憑在論

第10回(01/12 前林) 場所・感覚・メディア (1)

第11回(01/17 赤松) リアリティの身体的転回

第12回(01/18 小林) アバターの哲学

第13回(01/19 前林) 場所・感覚・メディア (2)

第14-15回(01/24 全担当教員) クロージング

教科書・参考書等

必要に応じて授業中に紹介します。

評価方法

種別	割合	備考
課題	25%	課題レポート
日常点	75%	出席並びに受講態度

メディア表現特論C(表現×科学・社会) Media Creation C (Creation× Science・Society)

担当・Castro Juan・四方幸子(非常勤)

単位:2単位 履修対象:1年/2年 教室:オンライン

学期:後期(10月/11月) 実施方法:オンライン

科目のねらい・特色

ポストパンデミックの世界に入り、近代を基盤にして形成されてきた諸システム(科学も含まれる)や人間中心主義的な価値観の再考がうながされつつある。現代において科学技術は、私たちに「現実とは」「人間とは」「生命とは」など、哲学・倫理的な問いを投げかけている。また現代は、人間が地球環境に及ぼした取り返しのつかない影響を表す「人新世」という地年代にあるとされる。そのような中、メディアアートは科学技術や社会といかなる関係をもちうるのだろうか。

現在、メディア・アートは、計算機科学(AI)、生命科学、宇宙科学など最先端科学に加え、地質学、考古学、人類学、民俗学など諸領域とのコラボレーションを活発化させている。授業では、これらの事例とそこで提示されている問題系を検討していく。具体的には、カストロが生命科学の領域を、四方が自然科学・人文学の諸領域に関わるメディア・アートを取り上げる。カストロは、生命と非生命の境、生命の起源、ウェットな人工生命、エイリアン生命などに加え、合成生物学と化学、宇宙生物学の分野を扱い、四方は、AI、生態系、人類学、考古学、民俗学、ジェンダー学、先住民研究などの側面を扱う。

到達目標

バイオメディア(biomedial)、ウェットウェア(wetware)、マイクロパーフォーマティヴィティなどの概念の変遷を辿ることにより、20世紀と21世紀の美学に新しいテクノロジーや生命科学が与えた影響を分析する(カストロ)。メディア・アートを、最先端技術の使用に加え、新旧メディアの創造的結合、そしてマージナルな位置や視点から社会に提起する問いや批評の実践として発見する(四方)。各担当教員が紹介する作品や事例の中に関連性や差異を積極的に見出し、自己の思考のための手がかりを得てほしい。

講義計画・項目

- 第1回10/3(月)ガイダンス(四方、カストロ)
- 第2回10/6(木)バイオテクノロジーとアート1(カストロ)
- 第3回10/11(火): バイオテクノロジーとアート2(カストロ)
- 第4回10/14(金): AIとアート(四方)
- 第5回10/17(月): 生態系とアート(四方)
- 第6回10/20(木): 地質学・考古学とアート(四方)
- 第7回10/24(月): バイオテクノロジーとアート3(カストロ)
- 第8回10/27(木): バイオテクノロジーとアート4(カストロ)
- 第9回11/2(水): 人類学・民俗学とアート(四方)
- 第10回11/7(月): ジェンダー、先住民研究とアート(四方)
- 第11回11/10(木): 生命らしい技術とアート(カストロ)
- 第12回11/17(木): マテリアル・エージェンシー(カストロ)

第13回11/21(月): 宇宙×生命×アート 1(カストロ)

第14回11/24(木): 宇宙×生命×アート 2(カストロ)

第15回11/28(月): ディスカッション(四方、カストロ)

*カストロの授業は基本的に英語ですが、場合に応じて日本語でも行います。(Castro's classes are generally taught in English, but may be conducted in Japanese as needed)

教科書・参考書等

必要に応じて授業で紹介します。

評価方法

種別	割合	備考
課題	30%	課題レポート、プレゼンテーション等
日常点	70%	授業への積極的な取り組み

メディア表現特論D(設計×情報・メディア) Media Creation D (Design × Information・Media)

担当: 小林 茂・Gibson James・水野大二郎(非常勤)・ドミニク チェン(非常勤)

単位: 2単位 履修対象: 1年 / 2年 教室: 講義室W(301)

学期: 後期(12月/1月) 実施方法: オンライン

科目のねらい・特色 // Aim of the Course / Features :

In order to achieve a better understanding and production of Media Creation, it is essential to gain insight into the question, "How might we design media that people want to engage with continuously?"

An excellent reference, or lens to view this is Service Design. Established in the 21st century, service design is a relatively new design discipline. As this developing process aims to understand and realize a better society, many professionals are working hard to document and share knowledge gained through research, practice, and teaching of service design. Therefore there is a growing abundance of books and research papers available to study, which in turn fuel the growth of service designs relevance and reach.

First, students will deepen their understanding of service design by participating in exercises set by the lecturers. Next, two external lecturers will join us and share their insights and experiences as both researchers and practitioners. They will introduce a number of related topics such as: service design tools, methods, theories, examples, and discuss the gap between theory and reality. Finally, through a critical and in-depth reading of selected research papers written by experts in various areas of service design, students will embody crucial information with the use of practical learning methods. In this way, students can apply knowledge gained to advancing their personal research in any field.

到達目標 // Objectives:

Develop an interest and understanding of Service Design, both from a practical and research perspective. Discover the diversity and depth of service design and learn the powerful, yet flexible nature of these processes and tools, realizing how Service Thinking applies to all areas of Media Creation.

Practical perspective.

Learn directly from professional practitioners in a series of presentations and discussions. Explore the gap between research and practice, examine the difference between cultures and personal biases and gain a perspective on potential unexplored research topics.

Research perspective.

Learning the process and importance of Critical Reading, while exploring research papers on such service design subjects as: process, tools, methods, theories, case studies etc.. After grasping the art of Understanding, learn how to assimilate and communicate through summarization, presentation and discussion. A valuable set of research tools which apply to all areas of master's research.

講義計画・項目 // Course Format / Plan:

Dec 5 (Mon.) 1 and 2: Introduction

Dec 7 (Wed.) 2: How to conduct a case study

Dec 12 (Mon.) 1 and 2: Case study and discussion

Dec 14 (Mon.) 2: Case study and discussion

Dec 19 (Mon.) 2 and 3: Service design in academia - Mizuno Daijiro

Jan 11 (Wed.) 3 and 4: Service design in practice - Dominique Chen

Jan 16 (Mon.) 2: Reflection of the classes so far.

Jan 18 (Wed.) 2 and 3: Critical reading hands-on

Jan 19 (Thu.) 2: Choose a paper and share questions

Jan 23 (Mon.) 2: Mid-term presentation and conclusion

Final report: a summary and comments of an academic paper within a few pages.

Note: English will be the basic language of communication.

教科書・参考書等 // Textbooks / Reference Materials

James Gibson、小林茂、鈴木 宣也、赤羽 亨『アイデアスケッチ—アイデアを〈醸成〉するためのワークショップ実践ガイド』ビー・エヌ・エヌ新社(2017年)

マーク・スティックドーン、アダム・ローレンス、マーカス・ホームズ、ヤコブ・シュナイダー(安藤貴子:翻訳、白川部君江:翻訳、長谷川敦士:監修)『This is Service Design Doing—サービスデザインの実践』ビー・エヌ・エヌ新社(2020年)

評価方法

種別	割合	備考
課題	50%	課題への取り組みと内容の評価します。
日常点	50%	講義への出席およびディスカッションへの参加状況の評価します。

メディア表現特論E(設計×身体・環境) Media Creation E (Design×Body・Environment)

担当: 赤羽 亨・平林真実・福原志保(非常勤)・安藤英由樹(非常勤)

単位: 2単位 履修対象: 1年 / 2年 教室: 講義室W(W301)

学期: 後期(10月/11月) 実施方法: 対面(状況に応じてオンラインとのハイブリッド)

科目のねらい・特色

我々を取り巻く環境は、テクノロジーの進化により大きな影響を受け、それらはシンギュラリティを語るまでもなく、身体へも影響してきています。

本講義では、「設計」をキーワードとしてコンピューティングの進化とそれに伴うコミュニケーションの仕組みの変化、また、工業デザインからスペキュラティブデザインに至る広義のインタラクションデザインのあり方について、各々概観します。さらに、バイオアート、ポジティブコンピューティング(ウェルビーイング)とある意味両極端と思える今後到来する環境・身体の変化について考えて行きます。

到達目標

過去から現在へと連続する環境の変化において、現在の位置を見定めた上で、バイオアートのような身体に関わる変化・進化、ポジティブコンピューティングのようなテクノロジーによる自身の見つめ直しという視点から、未来に向けた設計とは何かを各自が考察し視点を定めらるような新たな議論を行えるようになることを目指します。

講義形態

講義とディスカッションによる対話型の講義、適宜課題が出されディスカッションに利用されます。

講義計画・項目

第1,2回 授業説明およびコミュニケーションシステムに関する講義

第3回 コミュニケーションシステムディスカッション

第4回 インタラクションデザイン概論

第5回 アート・デザインの中のインタラクション、インタラクティビティ

第6回 ディスカッションおよび、デザイン史から捉えるスペキュラティブデザイン

第7,8回 バイオアート講義およびディスカッション(福原志保)

第9,10回 コンピューティングの歴史

第11,12回 ポジティブコンピューティング講義およびディスカッション(安藤英由樹)

第13回 リフレクション

第14,15,16回 発表・ディスカッション(安藤英由樹、福原志保)

教科書・参考書等

授業中に紹介します。

評価方法

種別	割合	備考
----	----	----

課題	40%	課題レポート
日常点	60%	出席並びに受講態度

メディア表現特論F(設計×科学・社会) Media Creation F (Design× Science・Society)

担当・金山智子・吉田茂樹・鈴木宣也・関口敦仁(非常勤)

単位:2単位 履修対象:1年/2年 教室:講義室W(W301)

学期:後期(12月/1月) 実施方法:対面

科目のねらい・特色

21世紀に入りおよそ20年が経過しましたが、技術やシステムと社会の関係は20世紀型のそれとは大きく異なっています。本講義では、21世紀における新たな社会の仕組みを設計する方法について、主にメディア・テクノロジーとアート、デザインの関係の観点から議論し探求することを目的とします。

コンピューターを始めとする情報関連技術や、インターネット等の通信手段や各種サービスの発達・普及が、メディア・コミュニケーションやコミュニティの形を多様化させています。20世紀後半に登場したインターネットは、公共圏全体を拡大していくのではないかという期待に反し、逆に公共圏の分断をもたらしています。インターネットのフィルタリングは異質な他者との対話を喪失させ、極端な二分化を促しています。さらに、2019年末から新型コロナウイルス感染症により世界が同時に危機的状況に陥り、これまで当たり前であった社会やコミュニケーションのあり方を根底から覆しています。21世紀において、人類だけでなく地球にとってこれまでとは異なる社会システムやコミュニケーションを構築していくことが喫緊の課題だと言えるでしょう。本講義では、既存のシステムやコミュニケーションのあり方を確認しながら、これからの社会を構築していくためには何が必要か、どのように変えていく必要があるのかについて考えていきます。

到達目標

メディアテクノロジーやコミュニケーションの、基本的な文献の理解をすすめながら、リサーチやディスカッション、グループワーク等から、メディア・テクノロジーにより形成されてきた現在の社会の姿とその課題を抽出します。課題解決に必要な項目は何かを様々な視点で考え、新しい社会の仕組みを形成するために必要な要素を検討し、それらを使った社会システムについて議論します。それにより新たな社会の仕組みの生成について考えます。

講義形態

座学・ディスカッション・グループワークなど

講義計画・項目

1-3. 授業説明+メディアと社会

授業概要の説明と、メディアに関する基礎的な考え方を取り上げ、メディアと社会、あるいは個人とメディアの関係について概観していきます。

4-5. インフラと社会

インターネットを始めとする現代のインフラに関する基本的な仕組みと変遷および、社会への影響について概説し、メディアやコミュニケーションと社会の関係を考える際の基礎について学びます。

6-7. コミュニケーションと社会

コミュニケーション技術とコミュニケーションの変容について理解し、これからのコミュニケーションのあり方と社会の関係について考えていきます。

8-10. アートからメディア技術と社会の関係を探る事例

社会システムの中にアートや表現がどう関わるかについて事例から考えます。

11-14. メディア技術と社会の未来

社会システムの仕組みやコミュニケーションについて考察し、今後の社会への影響について考えます。

15. まとめ

教科書・参考書等

必要に応じて随時配布、指定します。

評価方法

種別	割合	備考
課題	50%	課題への取り組みを評価します。
日常点	50%	ディスカッションへの参加度合いについて評価します。

論文研究 Thesis Writing

担当: 小林昌廣(各教員)

単位: 2単位 履修対象: 2年 教室: 講義室W(W301)

学期: 前期(6月/7月) 実施方法: オンライン

科目のねらい・特色

IAMAS生にとって最終成果物のひとつである修士論文を執筆するために必要な「関連文献」の検索法と読解法について、ジャンルや専門を問わず、きわめて普遍的な立場から展開する、文字通りの「論文-研究」です。論文や文献を広く「書かれたもの」と捉え、それらを美学的な批評の対象とするわけでもなく、また論文執筆のための有用な道具とするわけでもなく、まずは肅々と「書かれたもの」の世界に没入することで、自身の研究との相対化をはかります。この読解は、たとえば当該論文にレファレンスがあればそちらのほうへと「読み」を派生させることになり、ほとんど無限に続く作業となることは言うまでもありません。論文を探す、読む、そしてそれについて話す。論文執筆のほとんど寸前までの行為でありながら、同時に「読む」ことが「書く」ことへと接続するような場所をめざします。

到達目標

論文を執筆することは単に期日までに一定量の文章を紡ぐことではなく、また、関連論文を読むことも論文を書くうえで自身の考えを支持するものではありません。「読む」ことが「書く」ことになり、「読み続ける」ことが「書き続ける」ことになる、そのような身体をつくりだすことが目標のひとつとなりますし、「読む＝書く」身体がほとんど生理的かつ日常的に運用されるような日々を送るためにも、その「生きられた身体」を毎回提出することが本講義の参加条件となります。具体的には自身が読むべき論文を参加者が持ちよってそれについて議論しあい、論文(の一部)としてフィードバックさせるような型式をとります。

講義形態

ゼミ形式

講義計画・項目

初回のみ「論文執筆」ないし「論文研究」に関する講義を行いますが、二回目以降は各担当教員によって進行の違いはありますが、論文執筆で必要とされるレファレンス(参考文献)の読解、それをまとめる能力、プレゼンテーションを行う力、話す能力などの向上と修士論文への準備を目指して指導することは共通しています。さらに論文を執筆する上での様々な技術・工夫・コツなどを具体的な論文を参照しながら学んでいきます。いわば「読み・書き・話す」という三要素が揃って初めて論文はできるわけですから、個々の能力のアップグレードを目標として、各担当教員の指導の下、文字通りの「論文研究」をしてまいります。

教科書・参考書等

評価方法

種別	割合	備考
課題	50%	参照すべき論文について発表ができたか。
日常点	50%	出席回数と発表回数。